

オルコット小品集

おばあさまの天使

大久保 エマ 訳
武部 本一郎 絵



もくじ

テッサのおくりもの.....	5
赤いおさいふ.....	35
小さな紳士.....	67
おばあさまの天使.....	87
パティーの家.....	133
作者と作品について.....	178



テッサのおくりもの



テッサは、暖炉だまのそばにすわって、おとうさんの帰りをまっています。ほかの子どもたちは、三人とも、カーテンのむこうの大きなベッドで、ぐっすりとねていました。外では、風がひゅうひゅう音をたてて、雪が窓まどをたたきつけています。部屋は、がらんとしていました。暖炉だまの火は、いまにもきえそうで、古い靴くつからはみ出したテッサの親指は、ここえそうでした。

テッサのおとうさんは、イタリアからアメリカにわたってきた左官屋さくわでした。いつもびんぼうでしたが、親切で、正直な人でした。おかあさんは、だいぶまえに死んでしまったので、いまは十二になるテッサが、弟や妹のめんどうをみていました。テッサは、ほんとうのおかあさんのように、いっしょうけんめいはたらいてきました。でも、いつも子どもたちをあたたかくさせて、おなかいっぱいいたべさせてやる

のは、なみたいていのことではありませんでした。

テッサはどんなにつかれても、かならず、おとうさんの帰りをまっています。そして、あたたかい夕ごはんがたべられるようにしていました。でも、テッサはひとりになると、いつも考えごとをしていました。考えることが、山ほどありました。だれかに相談さうだんしたくても、友だちといえは、二階にがいにいる竖琴なごとひきの少年トモと、煙たばこ突つのオオロギしかいませんでしたから。

いまも、テッサはまじめくさった顔をして、ひたいに八の字をよせていました。考えているのは、古い靴くつのことでも、からっぽの戸だなのことでも、弟たちのぼろぼろの服のことでもありません。テッサの頭には、一つの計画がありました。どうやったらそれを実行できるかを考えていたのでした。

一週間もしないうちに、クリスマスがやってきます。テッサはなんとかして、弟たちの靴下くつもとに、プレゼントをいれてやりたい、と考えていました。おかあさんのいたころは、いまよりくらしもらくで、クリスマスになると、子どもたちは靴下くつもとには

いったプレゼントをもらいました。でも、テッサの手もとには、いまは一ペニーだつて、ありません。おとうさんのもつてくるお金は、たべるものや、たきぎや、家賃^{かぢ}できえてしまいました。

「親切な妖精^{まじな}がいたらねえ！　ねがいごとをしただけで、ばっ！　ひぎの上に、ほしいものがみんなでてくるの。」

テッサはひとりごとをいいました。

「わたしもはたらいて、お金をもらえないかしら。でも、なにができるんでしょ。こんなにちびで、頭がわるくて、はずかしがりやなんでも。だけど、なんとかして、みんなにクリスマスプレゼントをあげたい！　なんとかして！」

テッサは、長い髪^{かみ}をひっぱりました。そうすると、よい考えがでてくるとでも思っているようでした。

でも、少しもよい考えは、わいてきませんでした。テッサは、だんだんゆううつになりました。町には、すばらしいものがどっさりあるのに、弟のノとセツパや、

妹のランツアには、なにも買ってやれないのですから。なみだが、テッサのほつべたをつたわりおちました。すると、コオロギがなぎだしました。もちろんコオロギは、人間の言葉^{ことば}をはなせません。でも、まるで、テッサのいったことに、こたえてくれたようでした。コオロギの美しい歌をきいたとたん、テッサの頭には、すばらしい思いつき^{おもひつき}がうかびました——それが、ほんとうにすばらしい考えだったので、テッサは両手をたいて、とびあがりました。

「これならできる！　おとうさんだつて、きつとやらせてくれるわ。」

テッサは、ひとりで声をだしていうと、暖炉^{だんろ}の火にむかつてうなずきました。

「トモなら、よろこんでつれていってくれる。あの人が堅琴^{かきね}をひいて、わたしがうたうの。歌はたくさん知っているし、びくびくしなれば、お金をもらえるかもしれない。だつて、タンバリンをたたくだけでも、お金をもらえるんだもの。そうだ、やってみよう。うまくいったら、すばらしいクリスマスをいわつてやれるわ。」

テッサは、さっそく階段^{かくだい}をかけあがって、トモの部屋へいきました。そして、あ

したから、いっしょにつれていってくれないかと、たのみました。トモは大よろこびでした。トモはまえから、テッサは歌がとてもしょうずで、あれくらいうたえれば、きつとお金をもらえるだろうと思っていました。

「でも、いいかい、外はとても寒いぜ。風はしみるようだし、指はこおちまう。一日は長いし、いじわるされると、夜なんかつかれて死にそうさ。きみはまだ小さいんだし、だいいじょうぶかなあ。」

トモは黒い目をした、陽気な、十四になる男の子でした。みなりはまずしくても、だれにもまけないぐらい親切でした。

「お金がもらえるんなら、雨や風なんかへいき。いじわるな人も、へいきよ。」

テッサはいいました。

友だちがたすけてくれると思うと、テッサは、すっかり勇気ができました。そして、トモにお礼をいうと、いそいでしたくをしにもどりました。おとうさんだつて、きつと反対しないでしよう。

テッサはできるだけじょうずに、靴のやぶれをぬうと、たった一着しかない上着を、なおしました。おかあさんのだった古いずきんとショールも、ひっぱりだしました。それから、ランツアの服をあらって、ほしました。あしたは、洗濯をしているひまはありません。テッサはトモが、とても早くでかけるのを知っていましたから、テーブルに、朝ごはんの準備もしました。こうして、すっかり夜のうちに、したくをしてしまうと、テッサはすわりこんで、知っている歌をおさらいしました。中から、とくにきれいな歌を、六つえらびました。そして、心をこめてうたったので、子どもたちは、夢をみながらにっこりしました。ちようどかえってきたおとうさんも、つかれた顔をほころばせました。おとうさんは、テッサから話をきくと、首を横にして、そんなことをしてはいけないといいました。でも、テッサがなんでもたのみこんだので、とうとう一週間だけ、ためしにやってもよいことになりました。テッサは、ニューヨーク一幸せになつた気がしました。

朝になりました。お日さまはでていましたが、つめたい風がふいて、通りには雪

がつもっていました。おとうさんがでかけると、テッサは大いそぎで家の中をかたづけて、弟たちに、きょうはでかけるので、トモのおかあさんのいうことをよくきくように、いいました。トモのおかあさんが、火のしまつや食事のめんどうをみてくれることになっていました。トモのおかあさんは、テッサをとてもかわいがっていて、いつもよこんで協力してくれました。ノノとゼップは、どうしてでかけるの、としつこくテッサにききました。ちびのランツアは、いっしょにいく、といつてなきだしました。けれどもテッサは、そのうちみんなにもわかりますよ、おとなしくしていたら、きっといいことがありますからね、というばかりでした。そして、ひとりずつにキスをすると、家をでました。

トモといっしょに通りにでたとたん、テッサは胸がどきどきしてきました。トモは堅琴を肩にかつくと、テッサに手をさしました。トモの手は、おせじにもきれいとはいえませんでした。テッサはうれしくて、ぎゅつとにぎりしめました。そして、やさしい友だちの顔をみあげて、元気をだそうとしました。

「さいしょにカフェにいこう。フランス人やイタリア人が、食事をする所さ。みんな音楽好きだし、コーヒーをごちそうしてくれることだって、あるんだぜ。きつときみも、コーヒーとお金少しぐらいならもらえるさ。みんな、気前がいいんだ。」

トモは、たばこの煙のたちこめる、広い部屋にはいつていきました。おおぜいの人が、小さなテーブルのまわりで、たべたりのんだりしていました。

「さあ、こわらないで、『美しきモニカ』をうたってごらん。ゆかいな



やつだから、みんなわらうぜ。」

トモは小さな声でいうと、**竖琴**をひきはじめました。

テッサは、きゆうにこわくなって、にげだしたくなりました。でも目のまえに、からっぽの靴下がうかんできました。そして、どうしてもやらなければだめだ、と思いました。年とつた、太ったフランス人が、テッサにむかつてうなずきました。テッサは、それにさそわれて、いつのまにか、うたいだしました。声ふるえて、顔は、みるみるまっ赤になりました。でも、テッサは、足もとのおんぼろ靴をみつめて、一気に入たいあげました。まわりの人は、わらいだしました。とてもゆかいな歌でしたから。太ったフランス人はにこにこして、またうなずきました。テッサは元気づけられて、だんだん声があまくできるようにになりました。トモの**竖琴**も、ずいぶんたすけてくれました。

「いいぞ、これなら、お金とコーヒーにありつけるぞ。」

トモが耳もとで、ささやきました。

ほんとうに、そのとおりにになりました。ささやかなコンサートがおわると、何人かの人が、テッサのさしだした帽子に、お金をいれてくれました。太ったフランス人は、テッサをひざにだきあげて、コーヒーを注文してくれました。おまけに、バターのついたパンまで、ごちそうしてくれました。テッサは、すっかりうれしくなりました。そして、カフェをでると、トモにいいました。

「みんな、とても親切ね！ 楽しいし、これならくにやれそうだわ。」

けれど、トモはこわい顔をして、首を横にふりました。

「そうさ。はじめにあそこへいったのは、みんな音楽がすきで、おなじ国の人だからさ。でも、あのへんのお屋敷なんかじゃ、そうとはかぎらないぜ。いそがしいから、歌だの**竖琴**だのに、かまっちゃいられないんだ。そういういで調子にのることはないさ。一日は長いんだし、まだ十二ペンスしかかせいでないんだからな。」

テッサは足をゆるめると、つめたい指をこすりました。テッサは、世界はなんて広いのだろうと思いました。そして、うちでは、みんなどうしているだろうと思

ました。

午前ちゆうのかせぎは、あまりよくありませんでした。みんな、とてもいそがしそうなうえに、あちこちでそりの鈴すずがなつて、堅琴おんこの音をけしてしまいました。ふたりは、大きなお屋敷おくのあるあたりへ、やってきました。窓まどに、きれいなおくさまや、かわいらしい子どものがたがみえました。ここでも、テッサは心をこめてうたいました。トモは、指がうごくかぎり、堅琴おんこをかきならしました。でも、ほとんどの窓まどは、しまったきりでした。たまに、ほんの少しのお金をなげてくれるおくさまもいましたが、たいていそがしそうに、すぐすがたをけしてしまいました。

お昼すぎも、ふたりはほうぼうをあるいて、うたいつづけました。はいつてくるお金は、ほんの少しでした。そして、夕方くらくなるころ、家へもどりました。テッサは、一日じゆう声をはりあげたので、口をきくこともできませんでした。そして、くたくたにつかれて、ごはんものどをとおりませんでした。でも、テッサはこの一日で、五十ペンスを手にいれることができました。トモは、お金をきっちり半

分に、テッサにくれました。

こうして、二、三日がすぎました。お金のはいつた日も、はいらなかつた日も、トモはかならず、半分にしてくれました。テッサは寒いうえに、くたくたにつかれましたが、やすみませんでした。そして少しずつお金がはいるようになったので、計画をひろげて、おもちゃやおかしのほかに、役にたつものを買いたいと思つていました。

クリスマスのまえの日になりました。テッサは、できるだけきれいに、みじたくしました。きょうはどうしても、たくさんお金がほしいと思つたからです。古いずきんの上に、赤いハンカチをかぶせると、黒いおさげの髪かみや明るい目に、よくあいました。トモのおかあさんが、長靴ながぐつをかしてくれました。長靴ながぐつは大きすぎて、つま先が上をむいてしまいました。一つも穴あながありませんでした。テッサは、貴婦人きふじんにでもなったような気がしました。手袋てぶくろもつていなかったので、テッサの両手は、ひどいしもやけになっていました。でも、テッサはシヨールで手をかくすと、長靴ながぐつ

をひきずつて、元気に外へでました。

一週間がすぎて、ポケットの中には、三ドルちかいお金がたまっていました。外は、なんてにぎやかなのでしよう！ だれもかれも、いきいきとして、うれしそうに大きな包みや、ヒイラギの輪をかかえていました。

「うちにもツリーがあつたら、ほかはなにもいらなだけど。でも、むりね。せめて靴下をいっぱいにしてやりましょう。」

テッサは、にぎやかなお店の中を、のぞきました。重そうなかごが、そばをとおつていきました。

「うまくいったら、なにかにありつけるかもしれないぞ。」

トモがいました。そして、どろ道があるきながら、ひとりりでくすくすわらいました。テッサとおなじように、トモにも、ちよつとした計画がありましたから。その日、ふたりは、少しもうまくいきませんでした。お客さんは、七面鳥や、おもちゃやツリーを買うのにいそがしくて、歌なんかきいているひまはありませんでした。

『美しきモニカ』さえ、きいてくれませんでした。

お昼すぎになると、雨がふりだしました。大きすぎる長靴のせいで、テッサの足はよけいつかれました。つめたい風がふいて、手のしもやけがびりびりしました。

そして、雨が、赤いハンカチを台なしにしてしまいました。トモでさえだまりこくつて、口ぶえをふこうともしませんでした。お金は、ほとんどはいりませんでした。

「もう一つだけ通りをいって、おしまいにしよう。きみも、つかれてるしね。さあ、顔をふいてやるよ。おれの上着に、手をいれてごらん。すぐ、ネコみたいにあつたかくなるよ。」

やさしいトモは、テッサの顔をふいてくれました。ぬれているのは、雨のせいばかりではありませんでした。テッサがひえきつた手を、トモの上着のポケットにいれると、ふたりは、ぬかるみの道を、そろそろとあるきはじめました。ぶかぶかの長靴のおかげで、テッサはさつきから、ころんではかりいきました。